

都市近郊農村地域における地域ビジョン策定手法に関する研究

～彦根市稲枝地区を対象として～

鵜飼 修（滋賀県立大学 地域共生センター 准教授）

1. はじめに

地方創生が唱われ、現在各地で様々な取組がはじまろうとしている。しかし、本当の地域の魅力を知らないまま、活かすことがないまま、東京や他地域のまねごとをしてしまっただけではもったいない。日本の地域振興は、どの地域に行っても同じ内容の金太郎アメのような地域振興がなされてきたが、その多くは地域の本質を理解してなされてきたものではなかった。反対に地域の人々は自らの地域特性を否定してきた感もあった。

これからの日本は人口減少の時代。文明開化以降、急激に増えた人口が急激に減ろうとしている。そうした中で、地球上で一つだけの私たちの「地域」の魅力が再認識し、活かすことが求められている。

2. 地域診断法

地域診断法は、対象地域で地域再生・活性化活動に取り組む際に、地域の状況を把握し、当該地域の本質的にあるべき姿、ビジョンを探る手法である。

ここで「診断する」とは、医療の分野に倣えば、地域を診察して、状況を把握し、地域の課題を見いだすことである。しかし、本稿における地域診断は「悪いところを見つけ薬を処方するのではなく、潜在する良いところを発見しその点を伸ばすこと」、「地域の自然治癒力を育む」という視点を持つこととする。すなわち、対処療法的に部分を治していくのではなく、その対象の潜在的能力を引き出し、健康度合いを高めていくという現代医療に対する代替医療の手法の導入である。潜在的能力を活かすことは環境への負荷を抑制することにもつながる。

なお、地域診断という言葉については、自治体の経営状況や、福祉分野を対象とした分野においても用いられているが、ここでの地域診断はそれらの属性も含めて、総合的な地域の状況を把握し、活かすことを目標とした手法である。

3. エコロジカルプランニング

地域診断法においては、地域の特性を一分野の専門に縛られることなく様々な視点において把握し、持続可能な地域としてその地域の本来あるべき姿や課題解決の方向性を見いだす手法としてエコロジカルプランニング(生態計画)の手法を導入している。

エコロジカルプランニングは 1960 年代にマクハーグが提唱した生態学に基づいた開発手法で、プロジェクト対象地を様々な環境要素(レイヤ)で評価し、それらを重ね合わせた総合評価で適地や方策を選定するものであった。1969 年に *Design with Nature*¹⁾として出版された。

日本においては、1970 年代に雑誌「建築文化」²⁾においてその概念と手法が詳細に紹介されている。また、山形県ではマクハーグによる指導も行われた³⁾。その後 1980 年代には、いくつかの論文⁴⁾が発表されたが、本格的な普及は見られず、1990 年代に入って、茨城県住宅供給公社と大成建設が共同して百合が丘ニュータウン六反田池周辺地区で実践的摘要を行った⁵⁾。

大成建設ではその後も開発プロジェクトへのエコロジカルプランニングの適用を試み、独自のマトリックス解析手法を用いた簡易な評価手法を開発し、2002 年「テーマコミュニティの森」⁶⁾においてその手法を公開している。

本稿における地域診断法は、この大成建設のエコロジカルプランニングによる地域診断手法を基礎として展開したものである。

マトリックスの分析では、大成建設型に倣い、ヨコ軸に大中小の 3 つのスケールを設定するが、タテ軸は、地域の特性に合わせて属性を選択する。これらタテヨコで構成されたマトリックスを 1 枚の用紙にまとめ、総合的に眺めタテ軸の属性毎の地域の位置づけと評価、横軸のスケール毎での地域の位置づけと評価を読み取り、最後にはナナメに(全体的に)

その地域あるいは対象地の特性を把握する。

ここで大切なのは、地域の本質的な特性を如何にして見いだすかである。そのためには、主観的な属性の選定による評価は避けなければならない。客観的視点で総体としての地域を診ることが必要である。そのために、可能であれば何度も属性を選び直し、タテ、ヨコ、ナナメの評価を繰り返し、客観的なデータに基づいた、誰もが納得し、間違いのないマトリックスを作成する。そしてこのマトリックスを「読み解く」ことで、その地域において何が大切なのかが見えてくる。

ここでのポイントはマトリックスの「読み解き」であり、地域で大切にしたい特性や物事は様々であるが、マトリックス上に展開した際に「ひとことである」とこの地域で大切なものは何か」という形で総合的な言葉で表現するのである。これが地域のビジョンとなる。

4. 地域診断ワークショップ

地域診断ワークショップ（WS）は、短期間でそうした地域の魅力を改めて発見し、共有する手法である。エコロジカルプランニングの手法を応用したマトリックス分析と形は異なるが、その要点を継承している。その要点を凝縮し1日で実施可能な手法として開発された。

地域診断WSの要点は、マトリックス分析における読み解きと同じである。地域の情報を整理し、その「つながり」を読み解くことである。地域診断法のマトリックス分析では、地学的、気象的、生態的、人為的特性の4つの側面から地域の情報を3段階のスケールで集め、そのつながりを読み解いていく。例えば、地学的特性であれば、標高や地質、水系などの情報をあつめる。そのデータを取捨選択し、マトリックス状に並べ、それらのつながりを解読していくことで、その地域の持つ本当の魅力が見えてくるが、地域診断WSではこの地域診断法の分析を簡略化して行う。地域の人、よそ者としての学生、そしてファシリテーターが参加し、地域について語り合う、まちあるきをする、情報を整理する、つながりを読み解く、という一連の作業を通じてマトリックス上に表出する要素を見つけ出し、それを読み解く。読み解いた結果、地域において未来に継承すべき大切なもの＝地域ビジョンを明らかにする。また、これら一連の分析を、地域住民の参加によるワークショップ形式で実施する事により、地域の価値を地域住民が共有することが可能となる。

さて、この1日で行うWS手法の結果と地域診断法のマトリックス分析で何日もかけて行う作業の結果は何が違うのか。地域におけるビジョンを見いだすという点においては、筆者はその結果に「あまり差がない」と考える。また、WS参加者の年代や性別が異なっているにもかかわらず、結果にもそれほど違いがないものと思われる。これは、地域の本質的な特性を見いだす手法としては差異がなく、1日で行ったとしても地域の本質的な魅力への気づきを行うことが可能であることを示唆しているのではないであろうか。

5. 研究の目的

そこで本研究では、2013年度、14年度に実施された地域診断WS（大人）、地域診断WS（小学生）、過去に実施された地域診断法マトリックス分析結果（大学院生が作成）および住民意識調査の結果を整理し、その結果の類似性確認し、その要因について考察を行う。

6. 研究の方法

対象地域は、彦根市稲枝地区（人口 12,798 人、4,568 世帯（2015年6月現在）、38町、3学区）とする。稲枝地区は彦根市南部に位置する農村地域であり、田園地帯の中に古くから形成された集落が残る地域である。一方でJR琵琶湖線は開発が進みつつある都市近郊農村地域である（図1）。

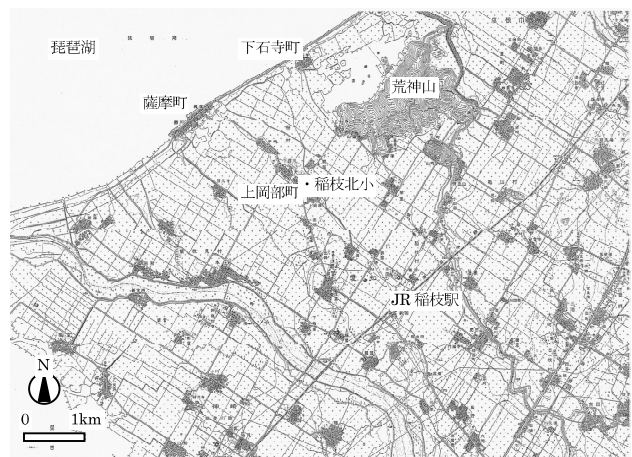


図1：彦根市稲枝地区の概況（国土地理院地形図を縮小し追記）

平成25年度および26年度において計6回（9地域）の地域診断WSを实践した。うち、1回は稲枝北小学校の6年生の授業として取り組み、4地域に子どもたちが分かれて実施している

地域診断WSでは、あらかじめ作成された手順に従って、「未来に継承すべきもの」をテーマに地域のビジョン作成を行った。また、集落規模では、一部

の集落において集落の特性との関連を考察するために住民へのアンケート調査を行っている。

地域診断の概念は、単に、地域を課題や問題、宝物を見出し整理するだけではなく、それらの「つながり」を考えることで、「何を未来に継承するのか」を明らかにするという考え方である。ワークショップ手法は、1人ひとりの参加者がテーマに関して、進行役の指導のもとに、まちあるき等の活動に参加しながら、それぞれの気づきや思いを付箋に張り出し整理する。なおここでいうビジョンとは「方向性」を示すもので、今回の内容で集落の未来を確定するものではない。

7. 実施概要

(1) 彦根市上岡部町

調査対象：彦根市上岡部町、日程：2014年2月23日、会場：上岡部町集落 県立大学学生活動拠点の古民家、参加者：合計 約 21名、・地元住民：12名（まちづくりに関心のある男女）・県立大学学生：5名・ファシリテーター（進行支援）：2名・進行役：1名・記録担当：1名

(2) 彦根市稲枝地区（1回目）

調査対象：彦根市稲枝地区、日程：2014年3月24日、会場：稲枝地区公民館、参加者：合計 15名・地元住民：8名（稲枝地区まちづくり協議会 各学区代表者2名、役員2名）・県立大学学生：4名・ファシリテーター（進行支援）：2名・進行役：1名・記録担当：1名

(3) 彦根市下石寺町

調査対象：彦根市下石寺町、日程：2014年8月23日、会場：下石寺集落 公民館、参加者：合計 19名 地元住民：11名（男性10名、女性1名）、県立大学学生：4名、全体進行役：1名、ファシリテーター（進行支援）：2名、記録担当：1名

(4)～(7) 彦根市稲枝北小学校 6年生 ESDプログラムにおける地域診断ワークショップの開催
調査対象：彦根市稲枝地区 上西川・下西川町、薩摩・柳川・甲崎町、上石寺・下石寺町、上岡部町
日程：2014年10月29日、11月13日、11月19日（まちあるき）、11月26日、12月4日、12月11日、報告会 2015年1月26日（学内）、1月21日（いなむら学習発表会）、会場：稲枝北小学校
参加者：小学6年生22名、全体進行役：1名、ファシリテーター：1名、小学校教員1～3名、まちあるきのみ：各地域でのまちあるきガイド（地元住民）4名、県立大学学生：8名（各地域2名ずつ）

(8) 彦根市稲枝地区（2回目）

調査対象：彦根市稲枝地区、日程：2015年3月7日、会場：稲枝地区 公民館
参加者：合計 17名 地元住民：10名（男性6名、女性4名）、県立大学学生：4名、全体進行役：1名、ファシリテーター：2名

(9) 彦根市薩摩町

調査対象：彦根市薩摩町、日程：2015年3月29日、会場：薩摩町公民館
参加者：合計 20名 地元住民：13名（男性8名、女性5名）、県立大学学生：4名、全体進行役：1名、ファシリテーター：2名

8. ワークショップの手順（下石寺集落）

タイムライン（p.5 図8のハンドブックを使用）：

10時00分 集合 実施内容の説明

ステップ1 自己紹介、アイスブレイキング

ステップ2 地元参加者から最初に地域の歴史・生活等について紹介いただく学生による聞き取り、記録作業

11時30分～ 休憩（昼食しながらの懇談）

12時20分～ ステップ3 まちあるき（雨天のためショートカットコース）

13時20分～ ステップ4 発見したもの・ことについての整理（ポストイットKJ法）、発表

14時45分～ ステップ5 つながりの整理、コンセプトづくり

16時30分 グループ発表、まとめ

17時00分 終了解散

17時30分 撤収

ステップ1：

自己紹介をし、アイスブレイキングを行い、2グループにグループ分け。



図2：アイスブレイキング

ステップ2：

各グループで地域住民による集落についての語りを聞き、学生は聞き取った内容をポストイットに書き出し整理する。



図3：聞き取りの整理

ステップ3：

まちあるきの実施：公民館 → 研修会館 → 曾根沼開拓事業記念碑 → ふれあい広場 → 琵琶湖 → 墓場 → エコ民家／コミュニティスペース → 本隆寺(滋賀県指定文化財「木造僧形神坐像」) → 公民館



図4：まちあるき

ステップ4：

2 グループに分かれ、集落の良いところ・気づきやまちあるきで発見したもの・ことについての整理



図5：ポストイット KJ 法での整理

ステップ5：

各グループで「未来に継承したい下石寺の〇〇〇」について話し合い、発見したもの・ことをつなぐの整理を行う。その後、グループでの結果を発表。

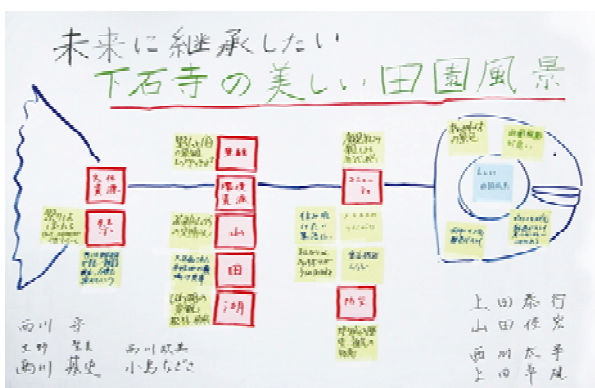


図6：つながりの整理（下石寺町）

9. 考察

地域診断WS (大人)、地域診断WS (小学生) と、過去に滋賀県立大学大学院近江環人地域再生学座地域診断法特論において大学院生が作成したもの、小学生の個人ノートの記載事項および、参考として下石寺町、上岡部町における住民意識調査の結果を加え、それらの一覧を表1に示す。

類似性の検証については、列ごとの結果を参照し、類似性がほぼある＝○、類似性にやや欠ける＝△、類似性がない＝□の3つの評価を行った。

① 稲枝地区については、WS結果がいずれも隣接の彦根市街と異なり、農村地帯のポテンシャルを象徴した結果となっているので「○」と評価した。

② 上岡部町においては、大学院生、WSの結果は整合しているが、小学生の最終結果は整合しなかった。しかし、詳細を確認したところ同じような認識をしていることがわかったので「△」とした。

③ 下石寺町については、荒神山、農地、琵琶湖と豊かな自然環境にあることが共通の結果となり「○」とした。

④ 薩摩町については、琵琶湖に隣接した湖水と暮らしのつながりが共通の結果となっているので「○」とした。

以上の結果からマトリックス分析とWSではその結果におおかたの類似性が確認された。

これらの類似性をもたらす要因としては以下の点が考えられる。

① インプットが類似していること

対象地域が田園地帯であり、シンボルである荒神山や琵琶湖、河川、農地などの地域資源がわかりやすく人々の認識が共通していることがインプットの類似性をもたらしていると考えられる。

② つながりの仕組みに普遍性があること

地域診断では地域の資源間のつながりを読み取ることで、例えば地形と産業や文化などの基本的なつながりを見いだすことに到達する。そのつながりはある程度地域資源が共有されていれば、人々によって大差はないからと考えられる。

10. まとめ

以上のように地域診断法の手法について、詳細な分析と簡易なWSによる結果の類似性を検証したが、両者には方向性が異なるような大きな差異はないことが明らかになった。地域の本質的なビジョンが1日で見いだされることは、地方創生を考える際に有効な手法であろう。

未来に継承したい
石寺町の自然循環



図7：小学生の成果（下石寺町）



図8：開発した「地域診断法ハンドブック」

11. 参考文献

- 1) 日本語版は1994年9月に下河辺らにより翻訳・出版された。イアン・L・マクハーグ著 下河辺淳総括監訳 川瀬 篤美総括監訳：デザイン・ウィズ・ネイチャー,集文社(1994.9)
- 2) 建築文化 344号(1975.6)特集・エコロジカル・プランニング地域生態計画の方法と実践 1, 建築文化 367号(1977.5)エコロジカル・プランニング・地域生態計画の方法と実践 2
- 3) 菅雅昭及び本間利雄の報告 日本建築学会・住宅の地方性小委員会通信 No.05-1(2005.7.4)
- 4) 瀬尾文彰,安立植：傾斜地開発におけるエコロジカル・プランニング：その 1 基礎的考察,日本建築学会学術講演梗概集,計画系(1981)ほか
- 5) 茨城県水戸市百合が丘町,設計:茨城県住宅供給公社 大成建設株式会社(1993)13.7ha150戸の住宅地開発。
- 6) タイセイ総合研究所,細内信孝：テーマコミュニティの森へヒューマンサイズの新しい都市,ぎょうせい(2002) 鶴飼は執筆を分担。
- 7) 鶴飼修,吉井隆 (2014) 農村集落における住民意識構造と住民意識傾向の分析によるまちづくり活動の戦略～彦根市下石寺集落におけるケーススタディ～,日本環境共生学会第17回(2014年度)学術大会発表論文集,pp226-233

注：本研究は滋賀県立大学公募型地域課題研究（平成25年度、26年度）「持続可能な地域まちづくりビジョン創造手法の開発」（研究代表者：鶴飼修、研究分担者：林宰司、地域連携研究員：稲枝地区まちづくり協議会 会長：西川正義、事務局：藤村伊蔵、西川時男）の成果をとりまとめたものである。

表1：各対象地域における地域診断結果の類似性

		対象地域			
		稲枝地区	上岡部町	下石寺町	薩摩町
地域の特徴		彦根市南部に位置する農村地帯。荒神山がシンボルとなっている。	稲枝北地区の内陸側に位置。クラスター状に連なる集落の一つ。	稲枝北地区の北東端。琵琶湖に隣接し荒神山の西側が入会地	稲枝北地区の西側。琵琶湖に隣接。湖上交通の歴史がある
作成主体	大学院生	農村地帯としての生態的、文化的ポテンシャル*1	文禄川、家長制度と町会組織、外部人材受入の土壌*2		
	ワークショップ ¹ グループ①	稲枝地区のいやしの空間	農業・文化・人・環境・歴史 上岡部 緑を大切に	下石寺の協働精神、共生精神（自然、伝統、文化、景観）	薩摩町の美しい水辺と暮らしのかかわり
	ワークショップ ¹ グループ②	稲枝地区の水と緑でつながる暮らし	上岡部町の水と暮らしと私	下石寺の美しい田園風景	薩摩町の水との暮らし
	ワークショップ ² グループ①	稲枝の田舎っぽい暮らし	—	—	—
	ワークショップ ² グループ②	稲枝の農業と文化と精神（荒神山）	—	—	—
	小学生（グループ）	—	上岡部の祈り	石寺町の自然循環	薩摩町の美しい琵琶湖の水
	参考：小学生（個人ノート）	—	上岡部町の伝統（昔から続いているから）	石寺町の自然（琵琶湖や川は自然で結ばれているから）	薩摩町の琵琶湖（水と地域の琵琶湖との歴史）
住民意識調査		—	琵琶湖、農地、荒神山、文禄川への意識が強い。環境意識がベースにある。*3	琵琶湖、農地、景観に対する意識が強い。時間的要因がベースにある。*4	—
共分散構造分析結果の特徴		—	—	—	—
類似性の検証（類似性がほぼある=○、類似性はやや欠ける=△、類似性がない=□）		○：隣接の彦根市街と異なり、農村地帯のポテンシャルを象徴した結果となっている	△：大学院生、ワークショップの結果は整合している。小学生の最終結果は整合していないが中身は同じ認識をしている。	○：荒神山、農地、琵琶湖と豊かな自然環境にあることが共通の結果となっている。	○：琵琶湖に隣接した湖水と暮らしのつながりが共通の結果となっている。

*1 荒木,中西ほか「人からつながるまちづくり」近江環地域再生学座地域診断法特論,2010,p28

*2 上岡部町地域診断チーム「上岡部町地域診断」近江環地域再生学座地域診断法特論,2012,p9

*3 鶴飼修,吉井隆(2014)農村集落における住民意識構造と住民意識傾向の分析によるまちづくり活動の戦略～彦根市下石寺集落におけるケーススタディ～,日本環境共生学会第17回(2014年度)学術大会発表論文集,pp226-233

*4 鶴飼ほか「持続可能な地域まちづくりビジョン創造手法の開発」2013年度滋賀県立大学公募型地域課題研究実施報告書,p11